

---

# リリカルなのは【最弱最強の護り手】

赤鷹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは【最弱最強の護り手】

### 【Nコード】

N5095Y

### 【作者名】

赤鷹

### 【あらすじ】

数有る転生者の中で最弱にして最強の主人公【伊附海斗】。彼は魔力も無ければ特別な能力も無い最弱な人間だが一つだけ最弱を簡単に最強にしてしまうチート能力を所有していた！

「ってこんな感じで言っただけど大丈夫か？」

「あゝ大丈夫大丈夫、どうせ誰も見やしないし」

「いきなり自虐ツスカ…作者」

「別に俺の作品なんて…」

「……（こんなので大丈夫か……？）」

## とりあえず転生者って事で（前書き）

なのは物は初めてとなる作者です。

この小説での主人公はシリアスでもボケ、ギャグでもボケます。

それではどうぞ！

## とりあえず転生者って事で

【ミッドチルダの爽やかな朝】

「ふあゝ、今日も暇で平和「死ねオラア！　ブンッ！　ブンッ！  
なっ！　うわあっ？！」　だなく、そーいや今日隊長が呼んでた「コン  
チクショ〜！　バンッ！　バンッ　なっ？！　跳ね返ギャツ？！」  
様な気がする…　ってさっきから何よアンタら？」  
す

「テツテメエ！　何だその能力は？！」

「能力？　あゝコイツか。　悪いいな、平常時は吸収と変換に設定して  
んだわ。　だから君達の今の攻撃は無駄。　てか俺なんかを相手にする  
だけでもっと無駄。　以上、じゃね？」

俺はそう言っただけで薄暗く狭い路地を抜け、大通りに出る。

うん！　今日も多分良い天気だ！

あつ、今更ながら俺の名は伊附海斗。　魔導師じゃないのに時空管理局に入局している『数ある転生者』の1人にして『最弱最強』の『転生者』だ。

最弱最強の意味は…

最弱ってのは俺にはまず『リンカーコアが存在しない』から魔力は無く、『その他の不可思議なエネルギー』を全て持ってないし扱いきれない。　だから俺は他の転生者より全てにおいて劣って居る。　まあ俺のレアスキルがあればそれすら全て超えるがな。

じゃあ何で最弱な癖に最強って言えんだって話しなんだが…さつきも述べた様に俺にはある一つだけチートを超えたチート能力がある。それは『どんな攻撃を受けても何食わぬ顔で無傷で受けた攻撃をそのまま返す』能力だ。

つまり俺に向かって核ミサイルが放たれるとする。（順を追って説明しよう）

核ミサイルが俺に向かって発射

俺に着弾！俺ピンチ！

と思ったら俺の体内に吸収され、そのまま俺の体内から核ミサイルが発射された場所に向かって発射

発射した場所が核に包まれた。

……となる。これは凡ゆる事にも対処可能らしく、この前『めだかボックス』の『大嘘つき』で俺の存在を消そうとした奴が俺の能力で逆に消えちまったし（ミイラ取りがミイラになるとはこの事？）、同じく『めだかボックス』の『完全』で俺の能力をパクろうとした奴がパクることが出来ないって言って尻尾巻いて逃げた事を覚えている。

他には俺に止まる様に指図して来た栗色髪に白い服を着た女性が俺何もして無いのに『スターライト……ブレイカアアアー……？？？』とか良い歳こいてそんな厨二な必殺ビームを放って来たけどその必殺ビームをそっくりそのまま送り返してやった時の顔は見

ものだったな。

なお、この能力に隙が無え?!とか弱点あんだろ?とつとと教えるよこのクズが!?!とか思ったり考えたりしている頭が残念の君達に朗報だ。勿論、この能力に弱点は有る。

それは…

『攻撃されなきゃただの突っ立ってる一般市民』って事だ。

……え?何処が弱点だとか思ってる頭が悪くて高校浪人生の君達。これがどういう意味か分からないのかい?

つまりこの能力は自分から仕掛けたら発動しないのだよ?俺が何もしなけりゃこっちは何も出来ないんだからな。……まあオートで反撃はするけど。

まあ兎に角!この能力は最弱の攻撃能力にして最強の防御能力って訳だ。因みに俺は攻撃を喰らっても痛くも痒くも無い。

……自分でも言うがコレなんてム力つくチート?

他の転生者とかはUBWとかガンダムとかウルトラマンとか仮面ライダーとかネギま!とか東方とかテイルズとか居んのになんで俺だけ対して目立ちそうも通常生活に支障も役立ちそうも無い地味イッつな能力なんだ?需要あんのかこの能力?

「はあゝ…「約束された(エクス)…勝利の剣!」<sup>カリバー</sup> キュインツ! キュアン! なっ?!うわあああああー!?!?!」

今日はよく転生者達が来るねえ。暇なのか？ニート？フリーター？親の金食い虫？まあ良いか。どうでも良いし」

てかさっきの転生者。こんな街中の大通りでそんな大技使うなよ。まあ消えたけど。

これで今日だけで15人目だよ？本当に暇かニートなの？ニートなら管理局に入れば楽なのに。そして俺の部署に入って先輩面している俺に目一杯コキ使われる。そうすればどれだけ仕事が楽になる事やら…。

ウチの部署は非魔導戦闘員で固められた通常人為事件捜査五課。つまり「包丁で人殺しました」とか「実弾兵器（拳銃とか）で銀行強盗しとるで」って奴を逮捕・現場検証・取り調べとかする部署だ。別名：墮落署。

全員が質量兵器所有の許可を貰っており、質量兵器を使って敵を制圧するこつிட்ட世界には珍しく、俺の出身惑星『地球』ではよくあるやり方だ。

ゲイズ親爺のお陰で質量兵器の所有が緩和になった為、勢いでロケランとかガトリングとかナパームとかマシンガンとか地雷とかミサイルや焼夷弾や…以下e t c。

を所有する権利・権限を修得しているのは管理局で俺1人だけだ。まあ当然だが。暇だったし。

さて、こうやって説明しているウチに自分に割り振り配属された自分の部署に着いた。俺はカードキーを通して中に入り、自分の机の上にバックを置いて、そのまま隊長室に入る。勿論、入り方は…



「ドガンツ！ オラアアアー！！？ ヤキ入れたんぞゴラアア  
アアー—————？？」

「ヤクザかテメエは?! もっと普通に入れやボケカス!？」

俺は押しドアを蹴り飛ばして中に入りヤクザな振る舞いを持ち出しながら侵入する。

中には特に説明する価値も無い面をした隊長と茶髪に短髪の狸顔した女性が居た。うんまあこういう時は…

「其処のアンタ、ワイの名あは伊附海斗じゃけんのおゝ、ヨロシク頼むけえゝ」

俺は左手を女性に差し出す。

「や、八神はなてです。こ、此方こそよろしゅう……」

女性も左手を差し出して手を握って握手をする。

…フン、左手の握手の意味も知らんとは…。

「オイテメエ、何時迄そのネタやるつもりだあ？ゴリア！？とつとと普通にしろ！」

「普通にしる！」それが彼の最期の言葉であつた……」

「死ぬんか俺は?！」

「まあ良いじゃねえか！どうせアンタの事なんて任天堂のバーチャルボーイか桃太郎の包丁並みのどうでもよくて忘れられ易い存在なんだから」

「デメエ！それが上司にいう台詞か？！」

「上司だったの！？」

「そこからか！？ってかネタ中断！やめい！話しが進まんだろうが！？」

「えゝゝゝまだネタ有ったのにいゝ」

「ハイハイ、後で巨乳シリーズのAV買ったから黙ろつか」

「Yes Boss。今回の私に与えられたミッションは何でしょうか？」

「その言い方止めろ。紹介は済んだから話しを続けるぞ」

「リーかい」

「この度この八神はやて氏が機動六課を立ち上げることになり、お前にも配属して欲しいんだ」

「へえゝゝゝ部署を立ち上げるんスね！その歳でスゲエな！」

「そんな事あらへんよ、試験期間が1年しかあらへん急造の部署やしゝゝでもウチの夢が漸く叶いそうなんや！」

「ふゝん、アンタの夢応援してるよ。んじゃ「ちよいと待てやゴラ！テメエワザと最後の部分飛ばしてそのまま立ち去ろうとしたなあ？」何の事やらさっぱり！俺の頭は4GBしか入らないから覚えて無いや」

「4GBって容量少なっ？！てか普通に4GBでも覚えてられるわ！？」

「…チイ、そこまでバカじゃ無かったか…やはり此処は証言隠滅の為に自宅に焼夷弾をぶち込んだ後にコイツを抹殺した方が…」

「恐ろしい事言ってんじゃねええー！！！？兎に角！貴様には機動六課に移籍して貰うからな！」

「お前は二一トに移籍しろ」

「お前をさすぞ！？オイコラ！？」

「あ、あのおゝ…そろそろお暇させて貰っても…」

「…ん？ああ悪かったな、八神。此方は直接的な関与は出来んが出来る限り協力は惜しまない気だ。頼むぞ」

「はい！ヨロシクお願いします！」

「おいそこ馬鹿面！八神はやて一佐の御帰りだ！お見送りして来い！ドゴオツ！？」

「グボオツ?!」

上司の踏み付けが顔面に突き刺さる。

クウー！何でコイツには俺の能力が通用しねえんだよ！全く、お陰で体内に保存していたドラゴンボールが3つ程排出しちまったじゃねえか。（勿論ながらギャグです）

「ああゝ痛てて…そんなじゃ八神一佐。此方になります…」

俺は上司を睨みながら八神一佐をエスコートしながら出口へ案内する。

### 【道中】

俺の右には頭一個分小さい八神はやて一佐と一緒に平行して歩く。

「さっきの上司との漫才おもしろかったで伊附二等陸士」

「え？なあに言ってるんすか？あれは『上司』と書いて『家畜』と呼ぶ仲ツスよ？」

「……何やる…突っ込んだら危険な気がプンプンするんやけど…」

「じゃあしない方が良いツスね。俺のギャグはアイツと藤子不二雄先生位しか受け流せないから」

「藤子不二雄先生受け流せるん!？」

「そうっすよゝ、もうあの人とは長い付き合いでして…倒れそうになった藤子不二雄先生に『リポリタンX』を飲ませたのも俺なんすから!」

「へ、へエ」…（ア、アカン！こういうタイプのギャグには付いて行けへん…！）」

そう思いながらはやて一佐は部署を後にした事は本人以外誰も知らない。

さて、見送りも済んだし、転移手続きとか後継ぎとかしなきゃいけないから今日は色々と準備しないとイケないから大変だな。

……取り上げず上司は後でゼロ距離スタンガンの刑だ。

あつ、因みにさっきから上司上司って言ってるけどこの部署の隊長の苗字が上司なだけだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5095y/>

---

リリカルなのは【最弱最強の護り手】

2011年11月17日20時41分発行